

Title	革命の遠兆としての外國旅行(下): (我維新史に就て革命理論上の一考察)
Sub Title	
Author	板倉, 卓造(Itakura, Takuzō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1935
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.14, No.4 (1935. 12) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19351230-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法 學 研 究 第十四卷 第四號

革命の遠兆としての外國旅行（下）

——（我維新史に就て革命理論上の二考察）——

板 倉 卓 造

一 序 言

二 社會不安と外國旅行の相關現象

1 フランス革命とロシア革命

2 『バビロンの俘囚』

三 我維新革命に於ける特例

1 洋學者の長崎遊學

（一）長崎

革命の遠兆としての外國旅行

革命の進兆としての外國旅行

(一) 一外國を成せる長崎

(三) 西洋文明の出張所 (以上前號)

2 甲比丹の江戸參府 (以下本號)

(一) Outsider と Insider

(二) 我國關史上の三甲比丹

(三) 世界的學書 *Timbers* と博學の Siebold

3 北極の探検

4 異國漂流

(一) 船頭光太夫の入露

(二) 舟子津太夫の世界一周

(三) 幕末の新知識中濱萬次郎

(四) アメリカ審獄

四 結言

2 甲比丹の江戸參府

(一) Outsider と Insider

ライフ・オード・ニドウィーズは何れの革命にも見る其革命前の一現象たる社會不安に就て、一社中より社外に出で、己の屬する社會よりも一層進歩した他の社會を見て歸來したものが、其新知識を

以て社會不安を刺戟する效果と、其反對に、一層進歩した社會の方から入つて来たものが、其知る所を以て社會不安を刺戟する效果とを論じた。社中の者 (Insider) で或期間、一層進歩した社會に在つた後、己の社會に歸つて来たものに比較すれば、社外の者 (Outsider) はそれほど有力な煽動者たるものではない」との説を成し、

「社會的激動ある毎に、被攻撃者が其困却を以て社外のまわし者や、煽動者等の使喚に依るのだと主張するのは、人のよく知る所である。此主張は歴史上の通例であつて、或程度の眞理を含んでゐる。蓋し社外の者は其入來せる社會の特有なる傳統、偏見、慣習、徳教、先例等に依つて拘束せらるゝ所はないから、彼は其社會を觀察するに感情的ならず、理性的である。即ち彼は其社會制度を客觀的に見、又これを智力的且つ比判的に判断して、然も常に必ずしも黙することなく、又遠慮することなく其失當及び缺陷を指摘し、以て人民をして彼等の短所を悟らしめ、彼等の社會と、彼の熟知せる他の一層進歩せる社會との比較論をなす。

併しながら此所謂社外の者の感化力には限度がある。即ち彼に對しては社外の者であると云ふ根本の偏見がある。且つ彼の社會的接觸は不完全である。故に其社會に不平を當然化する事情が存しなければ、彼は敢て煽動を試みることなく、又それを試みた處で決して成功するものではない。

尤も不平が既に存在してゐる場合には、社外の者が之を暴露することはある。之は常にさうだとは認められないが一の有益な公的奉仕であると云はねばならぬ。併し社外の者にしても又社中の者にしても、其處に煽動せらる可き不平が存在しなければ、不平を煽動することは出来るものではない。社中の者で或期間、一層進歩した社會に在つた後、己の社會に歸つて來たものに比較すれば、社外の者はそれほど有力な煽動者 (Agitator) たるものではない。インドの婆羅門族が一切の外國旅行を以て、階級制度に取り危険であるとして、之を禁じてゐるのは實に賢明である』。(Lyford Edwards, *Natural History of Revolution*, pp. 24, 25)。

と云ふのであるが、我維新革命の歴史に於ては、二百餘年の鎖國の爲に、所謂『社外の者』は自由に我國内に渡來することを得ず、隨つて我社會不安又は社會不平を煽動又は刺戟した例を見ない。故に西洋文明の新智識に依つて、當時の我人心に何等かの影響を與へたものがあつたとすれば、主として長崎に遊學した蘭學者であつた。エドワーズの語を以てせば、彼等は一層進歩した社會を見て歸來した所謂『社中の者』である。

然らば我維新革命史には『社外の者』の影響は絶無であつたかと云ふに、決してさうではない。長崎に渡來したオランダ人は唯一の『社外の者』であつたと共に、又所謂『煽動者』として極めて有

力なる「社外の者」であつた。幼稚ながらも西洋文明と世界の形勢を知ることを得たのは、一にオランダ人の媒介に依るものであり、幕末に於ける開國論は之に促されて起り、聽て維新革命の一誘因たるに至つたのであるから、或は之を以て「社外の者」の煽動と呼ぶのは、聊か奇矯の言に失するならんが、少なくとも其指導もしくは感化に歸せねばならない。果して然らば我維新革命史に於ては、「社外の者」の指導力もしくは感化力こそ寧ろ大に有效であつたと認められるのである。而して其所謂「社外の者」としてオランダ人の長崎渡來が、當時の蘭學者に及ぼしたる影響の大なるは、云ふまでもないと同時に、オランダ甲比丹の定期的江戸參府に至つては、西洋文明の喝仰者の爲に、新知識を貪食する無上無二の機會を與へたものであつた。長崎を以て西洋文明の出張所、世界の事情の案内所であつたとすれば、甲比丹の江戸參府旅行は、西洋文明の出開張であり、世界の事情の中繼放送であつた。

(二) 我開國史上の三甲比丹

蘭學者が長崎に下つて學んだ其苦學は、今の海外留學生が歐米に遊學するのとは、固より同日の談ではない。併し四年一回のオランダ甲比丹の江戸參府を待受けて、居ながらにして新知識を得た江戸の蘭學者は、大に幸福であつたと云はねばならない。出島のオランダ商館長即ち甲比丹は、毎

年正月十五日、長崎を出發東上して江戸に參府し、三月朔日、登城して將軍に拜謁し、方物を獻じて通商許可の御禮を言上するを例とし、之を江戸參禮と稱し、又將軍のオランダ人御覽と唱へた。然るに寛政二年(1790)に至り、毎年の參禮を四年一回に改め、他の三年は大通詞に委託して献上を代理せしめることになつた。其江戸參府の一行は、オランダ人側は甲比丹、書記、醫師の三人にて、我案内側は檢使一人、大通詞一人、小通詞一人又は二人の定めである。而して出島に駐在した甲比丹の中で、我開國史に其名を特筆す可きものとして、少なくとも三人を擧げねばならない。

1. Feith — 先に安永年中、長崎に於て工藤平助、林子平の徒にロシアの南下、北邊の危急を告げた甲比丹 Arend Verle Feith は、明和八年(1772)長崎に來任し、天明元年(1781)歸航の途、客死するまで凡そ十年間に數回日本に渡來し、江戸に參禮すること六回に及んだ。其江戸滞在中、蘭學者が彼に教を求めた實話は、桂川甫周の物語として、彼の弟森島中良の記したる『紅毛雜話』(天明七年1787)の中にも傳へられてゐる。(同書卷三)。

2. Titsingh — 我國に於ける洋書の元祖司馬江漢が師事したる甲比丹 Isaac Titsingh に至つては、功績の最も大なるものであつた。安永八年(1786)長崎に來任し、翌年及び天明二年(1782)の兩度江戸に參府し、天明四年(1784)までに日本に渡來すること三回、其江戸に逗留中、蘭學者に

ては幕府の醫師桂川甫周、中川淳庵、諸侯にては當時蘭學のパトロンたる丹波福知山の藩主朽木昌綱、薩藩主島津重豪、有司にては長崎奉行久世廣民等と交はり、就中、中川淳庵が彼に託して、蘭書數部を海外より取寄せたるが如き、又朽木昌綱の『西洋錢譜』、泰西輿地圖説』が、多く彼の感化に依つて成れるが如き、更に當年珍重せられたる Chomel の『日用百科辭典』が彼に依つて始めて傳來せられたるが如き、我國洋學の發達に於ける Tisinga の功は没す可からざるものがある。

3 Doeff——甲比丹として最も永く日本に在留したる Hendrik Doeff は、寛政十一年(1799)出島商館の書記として長崎に來り、享和三年(1803)甲比丹に昇進して、文化十四年(1817)バタヴィヤに遷るまで前後十八年に及び、其間江戸參禮を勤むること三回(文化三年1806、文化七年1810及び文化十一年1814)、甲比丹として斯く久しく在留せしもの彼の如きは前後その例なし。蓋し時恰もヨーロッパはナポレオン戦争中にて、本國オランダはフランスに征服せられ、ジャバ、亦イギリヌの爲に占領せられたので、蘭船の來航全く絶えた結果、空しく長崎に留まるの已むなき事情に依るものである。彼が三回の江戸參府に就て自ら記する所に據れば、其江戸滯留中、彼の旅宿を頻々訪問して、親しく教を求めたもの、又は彼と交を結んだものに、蘭學者にして有名なる幕府の天文方高橋作左衛門あり、典醫にして植物學研究の熱心家桂川甫賢あり、前記薩藩主島津重豪の次子に

(714)

して 中津藩を繼ぎたる藩主奥平昌高あり、藩主の命を以て蘭學に志せる中津藩士神谷源内あり、彼等は何れも Doeff に蘭名を乞ひて自ら之を名乗り、頗る得色ありしと云ふ程に洋風に狂したものであつた。當時の學者が江戸參府の甲比丹を訪ねて、如何に熱心に新知識を求めたるか、Doeff の『日本回想録』(1833)中に左の如く記してゐる。

「將軍の拜謁済むまでは、我等と職務上直接關係ある人以外は、如何なる日本人も我等を訪問することを許されず。されど其後は將軍の典醫及天文方は普通三回づゝ我等に面會を求む。此等の訪問は儀禮及挨拶につき甚だ面倒なれども、彼等は種々の質問を提出して其の説明を請ひ、如何に知識慾の大なるかを觀ては、其の忍耐力と研究心とに驚歎せざるを得ず。其の醫術及藥草に關して知識を欲することは實に無限なり。彼等は往々豫め充分準備したる質問を發するが故に、我が醫師は此の場合に於て敏捷を要し、即座に答辯すること必要なり。」(齋藤阿具博士譯『ゾーフ日本回想録』一七七頁、一七八頁)。

尙ほ Doeff の功績として最も大なるはオランダ人 Francois Halma の蘭佛對譯字書を基とし長崎の通詞等の助を假りて蘭日字書を著はしたことである。尤も其出版の公許されたのは後年安政年中のことであるが、我蘭學の爲に貢献した所は多大である。此書は之より先き寛政八年(1796)稻村

三伯が Halma に依つて、蘭語に我譯語を當て、「波爾未和解」(又は「波羅麻和解」)十三卷即ち俗に「江戸ハルマ」を著はしたるに對して、「ドウフハルマ」「道譯法兒馬」又俗に「長崎ハルマ」と稱せらる。

甲比丹の江戸參府を待受けて、我天文學者、醫學者、本草學者等が其旅舎に訪問し、殆ど連日連夜、質問を續發して、恰も彼より一切の知識を絞り取る程の熱烈なる研究心を示し、蘭人を驚かしたのは毎度のことであつた。文政五年(1822)甲比丹 Blomhoff の二度目の江戸參府に隨行したオランダ商館の書記 Van Overmeer Fischer は、文政三年(1820)始めて渡來し、文政十二年(1829)日本を去るまで、長崎に留まること九年の久しきに及んだのであるが、彼の日本に關する著書(1833)中その江戸參府の記事中に、學者、貴人等が日夜來訪して、有らゆる種類の質問を試みた状を述べてゐる。

「貴人は多く夜遅く來り、翌日其の使者が贈物を持參し、我等の接待に對して謝禮するまでは其名を告げず。斯かる折は少しも儀式張らず、彼等も往々其の從者と同様、麻衣即ち普通の平民服にて來り、主君が愉快に興に乗ずれば、從者も共に打解けて我等の談話又は其の質問に對する説明を書留めんとせり。彼等はいつも柔和にして愛想良く、熱心に歐洲の藝術、學術、風俗、習慣、

又和蘭本國及其の印度領土の位置及管理等に關して、種々の質問を爲せり(齋藤阿具博士の「フイツセル參府紀行」四六頁)。

其旅舎を訪問せる貴人の中に、薩摩侯、松前侯、丹波侯、西丸側衆蟻川相摸守、將軍の弟なる水戸侯、中津、平戸、尾張、加賀諸侯の藩士を擧げてゐる。平戸の藩主松浦靜山が家臣四人を従へて、一夜(文政五年二月二十四日)石町なる長崎屋の定宿に甲比丹 Blomhoff 一行を訪ひ、雜問を濫發した問答を、同行の修驗者行智なるものが筆記してゐる其一問一答は、頗る珍談に富む。(『甲子夜話』卷六十三)。

『十三、十四の兩日(四月)も前日と同様に、幕府の天文家、博物學者、及數名の醫師來訪せり。甲比丹は不快のため、此等の訪客に應接すること能はざりしかば、予は之に代りて、如何に困難なる質問にても、努めて之が答辯に當り、予の學ばざる學科にても、此等の學者の知識慾を満たさんとせり。研究の諸點は重に制御品、晴雨計及寒暖計の發明及効用、計時法、羅針盤、大洋上の經度、日月及諸星の運行、其他物理及數理上の諸問題なりき。予は自分の學識よりも寧ろ携來りたる二三の書物に依りて、多少彼等を満足せしむることを得たり(『フイツセル參府紀行』五七頁)。

右に云へる訪問の天文家、博物學者、醫師とは、桂川甫賢、大槻玄澤、宇田川玄眞(或は椿庵か)淺長安、高橋作左衛門、其他の徒である。(同書四一頁)。

(三) 世界的學者 Thunberg と博學の Sebald

日本に渡來したオランダ甲比丹は、本來學者と稱す可きものではなく。Doellの如き Trillinghの如き出色の人物もあつたけれど、其學識に至つては固より大に云ふに足らず、又彼等に隨行した蘭醫とても、其學殖は未だ學者を以て目す可きものではなかつた。然も當時の我國情に於ては、西洋文明を知り、其學術を學ぶには、尙ほ以て師とするに足るものであつた。否な彼等に依るの外、海外の知識を求むるの途は殆ど絶無であつた。故に我學者、有志の輩が親しく長崎に赴きて、彼等に教を乞ひ、又は其江戸に參府するを唯一の機會として、彼等の旅宿を訪ひ、頻に質問を濫發し、知識を貪りて飽くことなかりしも、蓋し其所と云はねばならない。併し日本に渡來したオランダ人の中にて、學識眞に優れたるもの亦決して絶無ではなかつた。元祿年中(三年1690より五年1692)甲比丹 Outhorn に隨行して長崎に來り、江戸參府にも上りたる醫員ドイツ人 Engelbert Kaempferの如き極めて博識の學者であつたことは、其名著『日本誌』に徴しても察しられる。然るに Kaempferの後八十五年にして、安永四年(1775)既紀の甲比丹 Feith に隨つて來朝した醫員スエーデン人

Carl Peter Thunberg に至つては、ヨーロッパの學界に在りても有數の學者であつた如く、彼は實に近代植物學の建設者と稱せらるゝスウェーデン Upsala 大學の教授大 Linné の高弟であつて、日本より歸國後、小 Linné の後を繼いで、名譽ある同大學の植物學及び醫學の教授に任ぜられたのである。當時彼の高名を聞き、ライデン、ロシヤ等の大學から争ふて彼を招聘せんとした程であつた。彼が渡來の翌年（安永五年 ムン）甲比丹の參府に隨行して江戸に上つたとき、早速彼の旅舎を訪問したものに五人の醫者と二人の天文學者があつた。彼が如何に歡迎尊敬されたかに就て、彼自ら「通譯が親切にも私の提灯を盛に持つてゐて呉れたので、この首府のうちに私の來る前に眞價以上の私の評判が立つてしまつてゐた。いつもの會社（和蘭東印度會社）の醫者よりもずっと學識ある和蘭醫として、私が來るのを凡ての人が鶴首して待つてゐたのである。實際いつもの會社の醫者は大部分が何にも識らない男ばかりである。私が巴里及びアムステルダムから持つて來た外科用の秀れた揃つた道具のために、一層彼等の眼には、私が偉く見えたのである。彼等の熱心な態度は、時には煩さくなることもあつたが、一面私はこのために愉快な時を過すことも屢々あつたし、又爲になる時を過すことも出來た『山田珠樹譯「ツンベルグ日本紀行」一五九—一六〇頁』と記してゐる。彼は天文學の質問に對しては、十分満足せしむるに足る答を與へ得なかつたことを、淡泊に告

白してゐるが（同書一五七頁）、然も醫學、物理學、植物學等に就て教ふる所は、訪問の學者を悉く傾聴せしめた。其學者の中で若き桂川甫周と中川淳庵の兩人の熱心と學才に感じ、彼は最も懇篤に彼等を指導した。

『私の忠實な弟子となつた例の二人の侍醫は、殆んど一日も缺かさずに私に逢ひに來た。私が欣んで教へてやつたことを、この二人は熱心に聞いたので、二人とも日本の醫者が持つてゐない智識を澤山に持つやうになつた。多くの病の徵候を判斷することも出来るし、これを歐洲で我々がするのと同じ方法で取扱ふことも出来るやうになつた』（同書一七三頁）。

Thunberg の如き稀有の學者が今より百五十年前の昔、我國に渡來したことは、我文化の爲に意外の幸福であつたと云はねばならない。彼に後ること約五十年にして、又一人の博學なる醫師が選ばれて長崎に來た。文政六年（1823）來任の新甲比丹 De Sturler に隨行したドイツ人 Philipp Franz von Siebold 其人である。彼は長崎市外の鳴瀧に塾舎を設けて、多くの子弟を教育した。其中に後年我醫學、植物學、天文學、洋式兵學、其他の學術に第一人者たる名を成したるものを輩出し、前記高野長英、小關三英を初めとして、其名近年まで人の耳に新なりし我植物學界の大先輩伊藤圭介の如きあり、殊に醫者には伊東玄朴、戸塚靜海、竹内玄同の如き、幕末より明治にかけて天下の

(72)

名醫と稱せられたものあり、四方の諸藩に重用されて、醫學と共に蘭學を講じたるもの亦少なからず、*de Groot* が日本に在ること滿六年の間に養成した門下の俊傑に依つて、我近代文明の基礎は其一部を築かれたのである。文政九年(1828)甲比丹に隨つて江戸に參府するや、最も頻繁に彼を訪問したものは、桂川甫賢、大槻玄澤、宇田川榕庵、土生玄碩、栗本瑞見、石坂宗哲、高橋作左衛門、最上徳内等の諸學者を重なるものとし、中津藩主奥平昌高、其家臣神谷源内、薩藩主島津重豪等亦屢々彼の旅舎を訪ふて熱心に教を受けた。就中醫者と天文方の訪問客最も多く、争ふて彼の齎せる新知識を貪り取らんとした。殊に最上徳内に就ては *de Groot* は徳内の學問の凡ならざるに敬服したるもの、如く、其探檢に基く蝦夷、樺木等の地理に關して、彼の説を傾聽したものである。(吳秀三博士譯『シーボルト江戸參府紀行』四七一頁—四七四頁)。幕府天文方高橋作左衛門に至つては、*Siebold* と親交最も厚く、遂に幕府の禁を犯して窃に日本地圖を贈りたる爲め、後日兩人ともに罪を得、作左衛門は半死し、*Siebold* は一時歸國を差止められ、後『日本を構ひ』となりて漸く出發を許された。彼の江戸滞在中に於ける我學者の訪問は、其著『日本史志』中江戸參府紀行(吳博士譯註)の中に詳である。(同書四五四頁以下)。

オランダ甲比丹の江戸参籠と蘭醫の隨行は、外國人自身の方より西洋文明の新知識を日本に傳來したものであつて、我學者は自ら國外に出づることなくして、世界を知り又世界に於ける日本を知ることを得た。然るに十八世紀の末期、ロシアが千島を占領して、南下の勢いよく切迫するや、幕府も北邊の危険なるを悟り、天明六年(1786)始めて吏を派して蝦夷地を巡行せしめた。其中にて之に隨ひたる浪人大石逸平は樺太に渡り、最上徳内は擇捉島に到り、更に後年得撫島に達した。鎖國の時代に、幕命に依つて公然國外に出でたるもの、最初の例であらう。

以後幕府は頻に北邊を巡檢せしめたのであるが、就中近藤重藏は寛政十年(1798)擇捉島に赴き、『大日本東土呂布』と大書せる標柱を立て、歸つた。彼は邊境の警備に心を留め、『邊要分界圖』を製し、又北海警備の策を建白し、松前氏の地を幕府の直轄とす可きことを進言した其言用ゐられて、蝦夷經營の業、茲に始めて緒に着いたのである。若し夫れ間宮林藏に至つては探檢の規模更に大にして、文化五年(1808)單身宗谷より樺太に渡り、遡んで其内地を究め、翌六年更に韃靼海峽を渡つて東韃靼地方に入り、黒龍江を溯つて遂にシベリヤに達した。形勢風俗を視察して再び樺太を経て宗谷に歸つた後、『東韃靼紀行』を著はし、其經歷する所を述べてゐる。日本人の探檢してシベリヤに入るもの、實に林藏を以て始めとするのである。

是等探検家の旅行に依つて、北邊の危急、漸く幕府と國民の間に知られ、次で露船の我近海に出沒すること次第に繁く、殊に露人の我北邊に入寇するもの頻々たるに至つて、海防の急務いよいよ其急を告げ、嚙て國內動搖の端を開いたのは、後年革命の遠因亦茲に發したのである。幕府が公然吏を北海の國外に派遣したのは、自ら鎖國の禁令を破棄したものと云ふ可く、最上徳内、近藤重藏、岡宮林藏の幕命に依る探検こそ、外勢が幕府衰亡の機を速めたる其前驅を成すものであつた。而して是等探検家の齎せる北邊の警報が、毎度幕府を狼狽せしめ、外勢に對する其無力を暴露し、國內人心の不安を醸成せしめたことに依つて、自ら幕府の衰運を促進したものとすれば、エドワーズ一派の唱ふる國外旅行を以て革命の遠光と成す説は、我維新革命史に於て、茲に稍や正確なる適用を認められるのである。

4 異國漂流

(一) 船頭光太夫の入露

岡宮林藏等は幕府の命を帯びて國外に出たものである。然るに茲に幕府の命を以てしたるに非ず、又自ら企圖したるにも非ず、天の運命に依つて偶然外國に渡り、淹留十年、或はそれ以上にも及びて、飄然再び日本に歸り、大に幕府を驚かしたものがあつた。異國漂流の船頭、漁民等の徒是れであ

る。

天明二年(1783)十二月十三日、伊勢白子村の船頭光太夫(幸太夫と記する書多々あれど誤なるが如し)其他十六人乗組み、紀州の御廻米を積んで同所を出帆した神昌丸は、江戸へ渡海の途中、同夜半、駿河沖にて俄に激風に遭ひ、それより次第に大洋に吹き流され、漂流八ヶ月にして、翌天明三年七月二十日、露領アリュシャン群島中のアムチトカ島に漂着し、居ること四年餘、天明七年(1787)七月十八日同地を出船して、カムチカに渡り、更に露國役人に伴はれてオコーツクに渡つたのは、翌天明八年八月三十日であつた。それよりシベリヤ内地に向ひ、ヤクーツクに着、翌寛政元年(1789)二月七日イルクーツクに到りて滞留すること二年の後、Laxmanなるもの父子に護送せられて、寛政三年(1791)一月十五日同地を發し、西行してモスコウを過ぎ、二月二十七日國都セント・ペテルスブルグに着いた。其間最初の同行十七人の内、アムチトカ島漂着以來病死するもの十二人、イルクーツクに病臥するもの二人、斯くて露都に達したものは光太夫、小市、磯吉の三人であつた。

五月より八月まで、離宮所在地たるツァイスコエ・セロに移され、當時威名嚇々たる女帝カタリナ二世に謁見した。露都滞在中、皇族、大官、貴人等に召されて日々款待せられ、市中各所の見物に

(723)

事日なく、女帝より勳章さへ授けられた。遂に歸國の許可を得、同年（我寛政三年（1791）十一月二十六日、いよいよ）幕都を出發し、Laxman 父子同道にて再びモスコウを経て、元來の途を順次東行し、翌寛政四年八月三日オコーツクに着いた。九月十三日漂流三人は Laxman の子 Adam Laxman 等五人三十九人に護送せられ、エカテリナ號に乗つて同地を出帆し、東蝦夷の根室に歸着したのは十月九日であつた。漂流以來茲に至つて實に約十年である。然るに歸國三人の内、小市は根室で病死したので、残るは光太夫と磯吉の二人であつた。翌寛政五年（1793）六月露船は更に箱館に轉じ、幕府の宣諭使と會見して漂流民を引渡し、此機會に通商を求めたけれども拒絶された結果、空しく歸國した。

八月十七日、漂流二名、江戸に送られ、町奉行所にて檢問を受け、九月十八日吹上御殿にて、將軍家齊これを引見、老中松平定信以下、幕府の大官有司列座して光太夫と問答した。町奉行所に於ける檢問は、徳本廉の「北槎異聞」四卷に詳にして、光太夫の口供書である。將軍の引見は、其時立會ひたる侍醫桂川甫周の「漂流御覽之記」に、光太夫と諸有司との問答書を載せてある。甫周は尙ほ翌寛政六年「北槎聞略」十二卷を著し、光太夫旅行の見聞物語を詳見してゐるが、此漂流の漂流及び入幕を記録したるもの他にも數種ありて、當時の耳目を驚かしたものである。

固より教養もなき一船頭のことであるから、觀察の淺薄なるは勿論、記憶も亦曖昧不正確なるを免かれなかつたけれども、光太夫は他の前後の漂流民とは少しく異色の人物であつた如く、滯露中、露語を覚え、露文にも多少通じたるを以て、彼がロシアの實狀に就て語る所は、當時に在つて確に外國の新知識たるを失はなかつた。彼の歸朝談を傳ふる『北槎異聞』『北槎聞略』等の學者の著書が、ロシアの國情に關する有益なる資料を供給したことを疑はない。恐らくは光太夫の物語に依つて、ロシアの國情が兎に角に始めて日本國內に詳にせられ、殊に幕府當局者は對外政策上に生きた參考材料を得たることならん。此意味に於て光太夫の入露は、我開國史及び維新革命の前史に於て、相當重要な地位を與へられて然る可きものである。

(二) 舟子津太夫の世界一周

仙臺藩の舟子津太夫の世界一周の大旅行に至つては、更に異聞中の異聞に屬するものである。

寛政五年(1793)十一月二十七日(即ち前記光太夫の歸京した年)仙臺の舟子十六人、石巻港から八百積み若宮丸と云ふに、江戸へ廻送の米を積んで開帆した。途中奥州岩城の海上に至つて、忽ち逆風に逢ひ、それより洋上に漂ふて年を越え、翌寛政六年六月、アラウシャン群島中の一島に漂着し、留まること凡そ十ヶ月、露人に送られてオコーツクに渡り、ヤクローツクを経て、寛政八年(1797)

(725)

○) イルクーツクに着き、享和三年(1803)春まで七ヶ年餘この地に滞在した。先年光太夫の一行中、此地にて病に罹り、其まゝ留まつて露人となつた Nicolai 事、伊勢の新藏に邂逅した。新藏は日本語通詞役人を勤め、ロシアの官吏となつてゐた。斯くて同年三月同地を出發西行し、モスコウを経て、四月末露都に着いた。十六人の一行中、途中にて死するもの六人、露都に達したのは十人と通詞新藏であつた。乃ち露帝アレキサンダー一世に謁見し、厚く待遇せられた。諸所見物も終りたれば、同年八月(以下西曆)いよく日本に送還せられることになつたのであるが、漂民十人の内六人はロシアに残ることを望んだので、津太夫、儀兵衛、左平、太十郎の四人のみクロンスタットより出帆の露船に乗せられ、露使 Riazanoff 護送の下に、海路西航して歸國の途に就いた。露使の使命は、漂民護送に依つて日本に通商を求めんとするに在つた。前年 Laxman の失敗に鑑み、此度はロシア皇帝の國書を齎して來た。

一八〇三年八月、デンマーク國コーペンハーゲンを過ぎ、九月英國フォルマス港を経て、十月カナリー島に寄り、それより大西洋を南下して十一月南米ブラジルなるサンタ・カタリーナと覺しき港に入り、此地に越年して、翌一八〇四年二月出帆、更に南航してホーン岬を迂廻し、太平洋に出て、北上西航し、五月下旬、今の佛領マルケサス島に繋船した。西北航して六月下旬布哇島に寄り、

いよ／＼北上して八月露都カムチヅカのペトロポロウスクに入港し、碇泊三十餘日にして九月十日出船、長崎に向ふた。我本土の太平洋岸に沿ふて南下し、薩摩沖を通過して、一八〇四年十月十二日、即ち我文化元年九月六日、遂によく長崎港内に歸來することを得た。露國クロナスタットを出帆してより一年二ヶ月、曩に寛政五年（1793）石巻を出船して岩城沖で難船以來、實に十二年目であつた。

漂流四人乃ち定法に據つて揚屋に入れられた。併し間もなく免されて仙臺へ歸國の途中、江戸に留められ、藩主伊達侯の命に依り、大槻玄澤、志村篤治をして漂流を尋問筆記せしめた。有名なる「環海異聞」は之に依つて成つたものである。玄澤が其序文中に「事々物々一として奇ならざる事なし。耳を飛ばし、目を長ふするの新話珍談とも也。地は北亞墨利加洲の屬嶋に始り、亞細亞洲、歐羅巴洲、亞弗利加洲、南亞墨利加洲の五大洲方を遍歴して、地球の四面環海一周し、驚濤九萬里を凌ぎ、再我東方に歸朝せしは、前代未聞、未曾有の一大奇事にして、上下古今、剖判三千年來、絶て無き所の奇話異聞也」と記するが如く、正しく開闢以來の大異聞であつて、一世を驚動せしめたものである。只この漂流等は元來無智の徒のみであつたから、其見聞記憶する所、淺薄曖昧なるを免かれず、隨つて其語る所、信ず可からざるの多々あれど、大槻玄澤が其物語に、丁寧なる評説を

(727)

加へたので、『環海異聞』は邦人に依る *First Hand* の世界的新知識として、當時恐らく之れ以上の珍書はあるまい。

(三) 幕末の新知識中濱萬次郎

幕末の頃、幕府に仕へて當時の海外新知識たりし中濱萬次郎も亦元は漂流民の一人であつた。彼は土佐の一漁夫にして、天保十二年(1841)正月十五日、同國宇佐浦より鯨船で南海に出で、漁業中、颶風に遭ひて難船した。乗組の漁夫五人中、萬次郎最も年少にして十五歳であつた。無人島に漂着して僅に饑を凌ぐこと五ヶ月、翌天保十三年六月、米國捕鯨船に救はれて布哇のオアフ島に連れ行がれた。同行の漂流民一人は後年この地に病死し、三人は下男奉公して其日を送りつゝ、只管日本へ歸國の機を待つてゐたが、萬次郎は捕鯨船長に伴はれて航海に出で、ガム島を中心として大洋を巡航すること二年の後、弘化元年(1848)の春、米國東岸マサチューセツ州ニュー・ベッドフォードに入港した。此港は當時米國捕鯨業の中心地であつて、捕鯨船の根據地であつた。船長は萬次郎を其對岸なるフニャヘツンの自宅に養ふて、學校に通學せしむること二年に及んだ。

斯くて弘化三年(1846)四月、捕鯨船の水夫に雇はれ、ニュー・ベッドフォードを出帆し、アフリの南端希望峰を廻つて、印度洋に出で、南洋諸島を経て、日本近海に捕鯨しつゝ、布哇オアフに再

來した。翌嘉永元年（1848）又南洋諸島の海上に捕鯨して、翌嘉永二年九月再度ニュー・ベッドフォードに歸港し、フネヤハゲンなる舊船長の宅に戻つた。偶々當時カリフォルニアの金坑発見せられて（1848）金米に Gold Rush の時代を現出した際であつたので、萬次郎の心も大に動き、金坑にて一儲きして、日本へ歸國の資金を作らんものと、同年十月、船長の許を辭し、米國船の水主に雇はれて、又もや希望峰を廻り、翌嘉永三年（1850）五月桑港に着いた。直にサクラメントに向ひ、ノース・リヴァーと稱する金坑に坑夫として働き、又は自身にて砂金を掘採り多少の貯金を得たので、金坑を出でて桑港に來り、同年九月米國商船の水夫に志願して布哇に到り、ホノルルにて前年別れたる漂民三人に再會し、如何にもして歸國せんと思ひ、米國商船の上海に赴くものに乗船を頼んだ。漂民の内一人は渡海を恐れて布哇に残つたので、萬次郎と外二人は、嘉永三年十月ホノルルを出帆し、翌四年正月二日、我琉球沖に至りて下船し、布哇で買求めて携帶した傳馬船に移り、琉球に上陸した。それより鹿兒島を経て同年九月三十日長崎に護送せられ、同地にて例の如く揚屋に入れられた。訊問の上、放免されて、翌嘉永五年（1852）六月、生國土佐に歸ることを得た。漂流以來實に十二年目である。

(724)

斯くて萬次郎は藩侯より徒士格に登用せられ、次で翌嘉永六年十一月六日幕府に召されて、御普

請役格に列せられた。時恰も米國使節ペリー來朝の年にして、幕府俄に對外多事の際であつたから、彼の英語と米國の知識は殊に其用をなし、専ら諸外國使臣の書信の翻譯に従事した。

萬延元年(1860)幕府始めて使節を米國に派遣するや、軍艦奉行木村攝津守の一行に通辯官として隨ひ、軍艦咸臨丸に乗つて渡米し、寫眞機、裁縫機を購ふて歸る。寫眞術及び西洋裁縫術傳來の最も早き一ならん。元治元年(1864)には薩藩に招かれて軍艦航海術と英語を教へ、明治三年(1870)普佛戰爭起り、觀戰の爲め大山巖、林有造等と共に歐洲出張を命じられたが、途中、病を發し、英米を経て歸朝、爾來世に現はれずして明治三十一年卒中を以て死んだ。日本人にして外國にて兎に角に學校教育を受けたるもの、思ふに彼を以て最初の例となす可く、少なくとも最も早きもの、一人であらう。彼の語學が幕府に於て重用せられ、殊に萬延元年我國最初の公式使節を外國に派遣した其一行の案内役として、恐らく彼は當時唯一の適才であつたに相違あるまい。之より先き安政元年三月二十七日、吉田松陰が伊豆下田に至り、窃に米艦に投じて渡米せんとしたのは、佐久間象山より萬次郎の事蹟に依つて動かされたに因るものである。漂民中に在りて彼と次に記する濱田彦藏の二人は、最も傑出した人物であつた。

(四) アメリカ彦藏

彦藏は播州濱田村の船乗の子である。十四歳のとき、嘉永三年（1850）十月三十日、千五百石積みの笨力丸にて、江戸より播州へ歸國の途中、遠州灘で暴風に逢ひ、洋上に吹き流され、船頭萬藏以下十七人漂流二ヶ月の後、米國商船オークランドに救はれ、翌四年二月桑港に到着した。當時米國政府は日本へ使節ペリーを派遣し、和親開港を求めんとした際であつたので、日本漂流民の到つたのを奇貨とし、使節派遣の用意成るまで、一年以上桑港に留め置き、一八五二年（嘉永五年）三月一行を軍艦に乗せ、布哇に渡つたが船頭萬藏は途中で病死した。五月香港を経て澳門に來り、茲にて米艦サスケハナに移された。然るに彦藏は曩に桑港滯留中親しくなつた米人トーマスなるもの、言に従ひ、英船に乗りて再び桑港に引返へした。同地に居る内、ボルチモアの商人にして、其頃桑港の税關長であつたサンダースに見込まれ、一八五三年（嘉永六年）七月その人に隨ふて桑港を發船し、中米ニカラガを経て八月ニュー・ヨークに着いた。國都ワシントンに同伴されて、時の大統領ビヤースに謁見した光景と感想を、彼は後年の自傳に面白く記してゐる。（土方、藤島兩氏譯、高市氏校訂『アメリカ彦藏自叙傳』一〇二頁以下）。主人サンダースの好意に依つて、ボルチモアの學校に通學し、カトリック教會にて洗禮を受け、名も Joseph Heco と改めた。

一八五四年（安政元年）十一月三日、サンダースに隨ふてボルチモアを出發し、ニュー・ヨーク

より乗船、パナマを経て十一月二十八日再び桑港に來り、此處にても亦學校に通へる内、一八五五年（安政二年）同地に恐慌襲來して、サンダースも破産するに至つたので、廢學して一會社に雇はれしに、偶々國會上院議員某なるものと知り、彼の言に従ふて一八五七年（安政四年）九月二十日又も桑港を發船し、十月七日ニウ・ヨークに着き、右院議員某に伴はれてワシントンに赴き、大統領ブカナツに謁見した。蓋し某は彦藏を大統領に紹介して米國官吏に任用せしめ、日米和親條約にても成らば、彼を利用せんと企てたのであつたが、其計畫失敗に歸した爲め、彦藏はボルチモアに歸郷せるサンダースの許に再び養はれ、一八五八年（安政五年）六月遂に歸化して米國市民となつた。其間米國の一海軍士官と知り、其斡旋に依つて支那及び日本近海測量船に書記として雇はれることとなり、七月サンダースの家を辭して、ニウ・ヨークより發船し、四度びパナマを通過して、七月末桑港に到着し、米國測量船に乗込みて、一八五九年（安政六年）五月上海に來た。恰も新駐日米國公使に昇進したタウンSEND・パリヌと同地で會ふた。ハリヌは彦藏を見て珍らしき人物となし、同伴の新任神奈川駐在領事の爲に通譯官に採用し、乃ち同行して六月十七日長崎に來着した。彦藏が嘉永三年（1850）遠州灘にて難船漂流して以來、十年を経て始めて再び日本の土を踏んだのである。

安政六年六月末日神奈川に入港し、同地の米國領事館に勤務することゝなつた。然るに彼は僅に半歳にして辭し、暫く商業に従事してゐた。時に攘夷浪人の跋扈甚しく、彼も亦身邊の危険を感じたので、文久元年(1861)九月翩然横濱より出船して、米國再遊を企てた。桑港よりバナマを経て、ニュウ・ヨークに到り、ワシントンに赴きて、一八六二年(文久二年)二月國務卿シワードと會見の結果、再度領事館通詞に任用せられ、又大統領リンカーンにも謁見した。即ち十月横濱に歸着して、米國領事館に再勤することゝなつたのであるが、未だ一年ならずして、文久三年九月又辭職し、再び商業に従事する傍、翌元治元年(1864)六月横濱にて『海外新聞』を創刊した。是れ我國に於ける民間發行新聞の元祖である。(土屋元作氏著『新聞の元祖』は彦藏の功績を傳ふるものである)。此新聞は慶應二年(1866)十一月頃まで繼續したのであるが、彼が之を企てた動機は、當時日本國內には海外の事情を知らんとする熱心儀に起り、殊に彦藏の名を聞いて彼の家に集まり、外國のニュースを聞かんとを請ふもの日々多きに鑑み、之が要求に應ぜんとしたことに在るから、新聞の内容は其名の示す如く、海外の出來事を報ずるを主としたものであつて、毎月二回横濱入港の外國郵便船が輸入する英字新聞から専ら記事を取り、彦藏の口譯を日本文に筆記せしめ、木板に彫り、毎月二回發行した。併し一方に海外の事情を知らんとするに熱心なるに拘らず、幕府を畏れて公然これ

を購讀することを憚りたれば、彦藏は其大部分を無料にて配布し、始終購讀したものは、僅に肥後の藩士某と柳河の藩士某の二人のみであつたと云ふ。随つて其發行部数は云ふに足らざるものならんが、然も當時獨力にて新聞を創刊發行し、國內に海外の新知識を弘めんと努めたる彼の事蹟は、大に傳ふるに足るものと云はねばならない。

彦藏が日本に歸りたるときは、維新革命の機運既に動きつゝあつた際であり、彼は直接に革命の事業に關係するものではなかつたけれども、間接に其革命運動を助けた事蹟は、決して之を没することを得ない。即ち慶應三年（1867）彦藏が長崎に在るとき、六月某日、桂小五郎（後の木戸孝允）と伊藤俊輔（後の博文）の兩人が、突然彼を訪問して、頻に英米の政體又は歴史に就て、委しく質問するに對し、米國憲法の大略を説いて、彼等を傾聽せしめたことがある。又桂、伊藤の兩人が幕府と薩長土間の開戦を豫想して、同年十二月伊藤を航海修業の名の下に、長崎入港の英國軍艦に乗組ましめ、以て海上より京都、大阪の狀況を窺はしめんとした計畫に參與奔走して、伊藤をして英艦乗組の目的を達せしめたこともある。更に兩人より長藩の爲に、在長崎代理人たることを託せられ、二年間無給にて長州方の爲に、勤王運動に働きたるが如き、其他明治の初年まで、對外交渉の公私事件に盡力周旋したるが如き、彦藏は維新革命の當時に於ける新知識として、其用を成したも

のであつた。後明治三十年十二月、病を以て東京に没した。

四 結 言

以上列記する所の學者志士の長崎遊學、オランダ甲比丹の江戸參府、北邊の探檢、異國漂流等、實際に外國に赴き、又は外國に赴きたると同様の旅行に依つて、當時の世界の形勢、海外諸國の事情を知り、之を國內に傳へて自ら開國の機運を促進し、以て幕府の對外政策を一變せしむる動機を作つたのは、同時に維新革命の遠因を成すものであつて、殊に二百餘年來の鎖國政策に依つて、世界に文明の國あるを知らなかつた日本國民の長夜の夢を破り、一時に民心を驚かしたのであるから、諸國の革命史に於て、國外旅行に依つて他國の國情を知り、之に刺戟せられて、現狀に對する人心の變化を生ぜしめ、漸次その革命の遠因を成すに至つたものに比較して、我維新革命に於ける國外旅行の影響は、數層急激であつたと云はねばならない。此意味に於て外國旅行が革命の遠兆を成すと云へる一般革命の理論に對し、我國の實例は寧ろ極めて適切なる證明を與ふるものと云ひ得るが如し。

但し外國旅行は革命の遠兆を成すとは云ふものゝ、單に國外に向つて旅行が殖えると云ふだけを以て、革命の襲來を豫報するものとするのは固より當らない。蓋し人の國外に出るのは常に必ずし

〔736〕

も國情に對する不安又は不平よりするものではなく、それとは全然無關係の動機原因に依るものこそ、却つて多き筈であつて、我異國漂民の如き特殊の異例さへある。茲に説く所の意味は、凡そ國外旅行の殖えるは纏て革命の來らんとする社會の一特徴たり得ると云ふに過ぎない。故に早晚革命の危険に瀕する社會には、其一特徴として、人の國外に出づるもの漸く多きを加ふる兆ありと云ふ説は、是等國外に出たものが、自國內に會て存せざる新知識を齎らし歸ることに依つて、人心に新變化を興ふる其影響が、後年の革命を促進する一動機たるに至るものと云ふ註釋を附して、其意味を解す可きものである。